2310 離島覚書(山口県・笠佐島)



大畠港から笠佐島を望む

令和5年6月27日 再訪

周防大島の4つの有人属島のうち3島(前島、浮島、情島)は内浦側にあるが、この笠佐島だけは外浦側、つまり柳井湾側にある。笠佐島への船便は周防大島の小松港から1日3便でており、水曜日のみ4便に増える。所要時間は約7分と、きわめて近い。

前泊した柳井の「パークホテル」からタクシーに乗り、本土と周防大島に架かる大島大橋を渡り、小松港に向かう。大島大橋は潮流が速く水運の難所として知られる大畠瀬戸に架かっている。1976(昭和 51)年に開通した。いち早く難所の海峡部に橋が架けられたのは地元選出の佐藤栄作元総理大臣の尽力と語られている。大島大橋が開通する以前は、旧国鉄が大畠駅と小松港の間に大島連絡船を運航していたので、小松港は周防大島の玄関口であった。

小松港を8時に出航する第一便に乗った。連絡船は他の属島と同様、周防大島町営である。船長と奥さんとも思われる女性が乗員であった。船には私の他に島に農作業にきた人が同乗した。料金は往復220円と安い。

笠佐島を訪れるのは 2012 (平成 24) 年 9 月 28 日以来である。この時、帰りの電車の中でカメラを失くし、笠佐島の写真が残っていないため、10 年ぶりの再訪となったものだ。

柳井湾はなじみの海域である。中国電力の柳井火力発電所(LNG火力)の環境調査やアマモ場のミチゲーションの仕事で、1980年代に頻繁に来ていた。笠沙島の周辺海域は環境調査の対象だったから、上陸こそしなかったが、笠佐島はよく知る島だった。

笠沙島は面積が 0.94 km²、周囲が 4.1 kmの楕円形をした島で、島の北東部に集落が形成されている。南風 (マジ) と西風を避けるためで、集落は大畠側を向く。対岸の本土側とは直線距離にして約 1 km。山陽本線の電車の通行が見られるほど近い。最高地の標高は 115

mとさほど高くはなく、遠くからはこんもりとした山に見える。

笠佐島はもともと柳井にあった塩田の燃料を採る島で、島内には松が生い茂っていた。 宮本常一著「私の日本地図、瀬戸内海Ⅲ、周防大島」には、「その後、燃料が松から石炭に 代わり、島の薪資源が不要になると、小松志佐村(注:対岸の周防大島にあった村)に住 んでいた中村という武士が百姓たちをこの島に住まわせて開墾させ、幕末まで中村家の所 領となっていた」と書かれている。つまり笠佐島に人が住むようになったのは幕末以降の ことであった。

谷戸が比較的広く米作に適した土地があったことと、段々畑で柑橘類の栽培ができたことから、この島の人たちは漁業ではなく農業を中心として生計を立ててきた。このため、昔から専業漁師はいない。





小松港に停泊中の笠佐島行連絡船 (左)、笠佐島から周防大島に架かる大島大橋を望む (右)

実質人口は2人に減少

1960(昭和35)年の国勢調査時の笠佐島の人口は111人であったが、その後減少の一途を 辿り、2015(平成27)年の国勢調査時には13人に減少、さらに2020(令和2)年には3 戸7人になっていた。なお2023年5月末時点の住民基本台帳上の人口は11人、世帯数は 6戸である。

島に置かれていた小学校の分教場は1933(昭和8)年に廃止され、子どもたちは船で大島の明新小学校に通っていた。

10年前に笠佐島を訪れた時の島民は、田中さん老夫婦、民宿を始めた河村幹雄(当時63歳)と韓国人の奥さん、90歳を超えるおばあさんの3世帯5人であった。この他に別荘が5戸あり、時々魚釣りや家庭菜園でやってくる人がいた。

連絡船の女性に5人のその後の消息を尋ねた。田中さん夫妻のご主人は96歳で亡くなり、 奥さんは本土側の施設に移り、島を去った。民宿「かささ」の河村さんは病気で本土の病 院に入院中、奥さんは島を離れたという。90歳を超えていたおばあさんはすでに亡くなっ ていた。つまり10年前に島でお会いした5人は全員が死亡ないしは島を離れていた。

当時の別荘5軒(島外からの移住者の住宅)は何れもそのまま残っており、港の近くに新しく1棟が建っていたので、全部で6棟分の別荘がある。在来島民の家は10数軒あるが、全て空き家になっていた。時々、畑の管理などで利用している家がある程度だ。このため長いこと使われていなかった家は蔦で覆われ、一部は倒壊している。こうした廃屋が半分

以上を占めている。10年前は朽ち果てた家の印象はあまりなかったので、この10年で家は 益々荒れてしまったのだろう。

現在、実質的に島に住んでいるのは I ターンでやってきた梶川さんという老夫婦のみの 2人だけになっている。

10年前の状況が理解できるので、田中さん(当時89歳)の話を再録しておこう。

田中さん(89)が船乗り場まで荷物を受け取りに来たので、早速民宿の前で話を聞いた。田中さんは平生からこの島に嫁いできた。ご主人は大工で対岸の柳井市に勤めていた。ご本人も柳井市の卸売センターに17年間勤めていたこともあり、勤めのかたわら米づくりとミカンを栽培していた。息子は島を出て大阪でサラリーマンをしており、孫は京都大学でロケット工学を学んでいるそうだ。田中さんの話では、自分が子供を育てるころはミカンで景気がよく、私立大学に通わせることができるほど収入があった。このため、近隣のほとんどの家の子弟が都会の大学に進学したのだという。離島の将来に不安を抱き、子供たちの教育に力を注いだのである。その結末は明らかであった。全ての子弟は島を離れ、社会の各層で活躍しているが、一方で島が衰退するのは宿命であった。





崩壊した家(左)、蔦で覆われた家(右)

漁家民宿かささ

また当時脚光を浴びていた漁家民宿「かささ」にも取材しているので、その記録も再録 しておこう。

2010(平成22)年3月に島出身で大阪市からUターンしてきた河村幹雄(当時63歳)さんが自宅を改装して漁家民宿「かささ」を始めた。奥さんは韓国出身の柱銀(当時42歳)さんである。また韓国人の女性1人が手伝いに来ている。この民宿のことは以前新聞か、雑誌で見たことがあるので、ここに泊まることを予定していた。しかし、時間的に島への最終便に間に合わないために船で迎えに来てくれるようお願いしたところ、当日は民泊の中学生が泊まるため手が離せないといわれて断られた経緯がある。しかたなく前夜は大島のペンションに泊まり、朝一便で笠佐島にやってきたのだ。

過疎の島に新しくできた漁家民宿ということで、随分マスコミに取り上げられ、朝日放送系の「人生の楽園」という番組で紹介されたこともあり、最近は島に来る観光客が多くなっているのだそうだ。また、周防大島町は民泊型修学旅行を熱心に誘致しており、修学旅行や民泊体験の来島者が増えている。

この日も防府から来た中学生が「かささ」に泊まっていた。 9 時ごろ河村さんの船に 5 人の中学生が乗り込み、釣り体験に出かけて行った。 11 時半ごろに戻ってきたところを港で会った。メバルが釣れたといっていた。中学生の話では、防府から来たのは総勢 130 人で島周辺に分宿しているらしい。そういえば、昨晩泊まったペンションにも中学生が泊まっており、夜、ハワイアンダンスを習っていた。ちなみに周防大島はハワイ移民の島として知られ、カウアイ島と姉妹都市の関係を結んでいる。

この民宿には今回も宿泊すべく電話をかけたが、「現在使われていません」とアナウンスされたので廃業したものを思っていた。柳井から乗ったタクシーの運転手によると、つい最近もNHKの「鶴瓶の家族に乾杯」にも取り上げられていたというから最近まで営業していたと思われる。念のためにネットで調べてみると、今年(2023年)の4月より休業となっていた。体調の回復次第では民宿再開の可能性もあるが、13年にわたって民宿を営業してきたことになる。



休業中の漁家民宿かささ

島一周

笠佐島の集落は1ヶ所だが、燃料の採取やミカン栽培などの関係から島を一周する道路が整備されている。しかし近年の過疎化、高齢化の進行で、人々の活動は集落周辺に限られていることから、島を一周する人はまずいない。

10年前に笠佐島を訪れたのは9月だった。この時は道路の周辺に草が侵入し藪こぎを強いられたため、島を一周するのは諦めた。今回の訪問では思ったよりも草が少なく、いつ撤退を余儀なくされるか心配しながら歩を進めたが意外にも大きな障害はなく一周することができた。ルートは反時計廻りである。所要時間は約2時間だった。

集落の西側の道を入り、集落の高台にある広い庭付きの移住者宅を過ぎると、孟宗竹の竹林になった。道路はコンクリートで舗装されている。その道路上に竹の葉が積もっている。瀬戸内海のどの島にもイノシシが生息しているため、笠佐島にもその可能性があった。途中で遭遇する危険性があるため、用心しながら進む。しかしイノシシの足跡は全く確認できなかった。どうやら笠佐島にはイノシシは生息していないようだ。道路脇は一面竹林だから筍のシーズンにはイノシシの大好物の筍が餌としてふんだんに得られるが、それ以外の季節は実がなる樹木は全く姿を消しているため、餌がなくなる。このことが笠佐島にイノシシが生息しない理由のようだ。ただカラスは非常に多く、竹林の間を飛び交っていた。

集落に近いところには杉が植林されており、それから孟宗竹、さらにマダケへと植生がかわる。竹は繁殖力が旺盛で既存の植生を駆逐しているようだ。

道路は海からは離れた少し高いところにつくられているが、やがて下り坂になり、視界が開けてきた。正面に無人島の野島が現れた。

道路はさらに下り、海岸に出た。小さな砂浜が広がる。陸側にはシャベルカー3台、コ

ンクリートミキサー車、ダンプカーが置かれている。来た道に轍がなかったので、どうやってここまで工事用車両を運んだのだろうか。後に連絡船に同乗した人にこの疑問をぶつけると、砂浜から揚げたのではないかという。一部に石垣がつくられ、これから使われるであろう大きな石が積み上げられていた。後で港に戻って船長に聞いたところでは、島出身の不動産業者(㈱オオシマリゾート)が別荘地を造成しているところだという。この造成地はちょうど集落のある北東側とは反対の南西側に相当する。

この現場から坂を登っていくと、道はやや深い草むらになった。ズボンはびしょ濡れになる。蜘蛛の巣が道にかかり、蚊も多い。半袖だったのは失敗だった。両腕の約20ヶ所を蚊に食われた。ここからは未舗装の道になる。いまさら来た道をもどるわけにはいかないので、ズボンは草露で濡れるが、無理をして進む。この一帯はいまだ竹は侵入しておらず、在来の広葉樹林がひろがり、ハゼの木が多い。道路上をアカテガニがちょろちょろと走り回る。そのうち、コンクリートの舗装道路になり、周辺はマダケの竹林が現れた。さらに孟宗竹へと変化する。杉の植林地が一部みられ、道路脇に廃車になった軽トラックやユンボが放置され、人家が近づいた証拠である。この植生の変化は反対側の人家に近いところを全く同じである。

そのうちかつての笠佐島の農業を支えたミカン畑が現れた。まったく手が入れられていないから、枝は伸び放題である。もちろん周辺からの竹や雑木が侵入して枯れてしまったミカンの木も多いことだろう。



集落近くの孟宗竹の竹林(左)、島の反対側の造成地と工事用車両(右)

別荘と新島民

在来島民の集落は港背後の海の近くに密集しているが、新島民の別荘は集落背後の旧農地だったと思われる場所に建つ。

集落北側の一番高台にある家が最も古くからあるようで、建物も大きい。10 年前に取材 した時には広島からの移住者のものだと聞いていたが、現在は住んでいる様子は見られな かった。おそらく後述する八木さんの家だろう。

南側の谷あいの一番高いところに同じタイプの別荘が2棟並んで建つ。このうちの1軒は住んでいる様子は見られなかったが、道路手前の1軒はナンバープレートのない軽自動車が駐車していたことから、比較的頻繁に利用している様子が伺えた。この住宅の前には大粒のヤマモモの木が植わっており、道路上に熟したヤマモモが転がっていた。

この下に2軒家が並ぶ。上段の家は 10 年前に来た時、連絡船の船長が、「家主、自ら3 年の歳月を費やして建てた」と語っていた家である。地図には「民宿わっふる」と書いてあるが、もちろん現在は営業していない。ここに住むご夫婦が上述した笠佐島に常時住んでいる住人ということになる。帰り際に船着場にブルーの軽自動車でご主人が現れたが、話をする時間がなかった。年恰好は 80 歳を過ぎている様子で、この軽自動車にもナンバープレートはなかった。家の周りには菜園やビニールハウスがあり、農業も楽しんでいるようだ。連絡船の女性によると、梶川さんという方らしい。

その下の赤い屋根の家は周囲にアジサイが植わり、手入れが行き届いていた。やはり住宅の近くに家庭菜園があったことから、かなり頻繁に島を訪れている様子である。

10 年前に笠佐島を訪れた時に八木さんという方にお話を聞いている。上述した5軒のどの別荘がわからないが、会社を経営していたことからすると、最初に記した一番大きな家の主かもしれない。当時聞いた内容を再録しておこう。

港に戻ると1隻の船が港に入ってきた。広島から移住してきた八木さん(当時 66 歳)である。島の対岸にある大島病院に行ってきたところだという。港で少し立ち話をした。心臓病を患っており、時々通院しているのだそうだ。以前、クモ膜下出血も経験しているが、その後支障はないといっていた。

広島市で建設業の会社を経営していて、公共事業がさかんな時代で大いに儲けたらしい。 人生を楽しむために 50 歳で早めに会社をたたみ、世界中を旅行してきた。49 歳で早世した 兄の生きざまを見て人生は楽しまなければと思ったのだそうだ。

魚釣りが好きで、タイ釣りのメッカである大畠水道によく釣りに来ていたことが笠沙島に住むきっかけになった。広島の自宅から高速道路を利用すれば約1時間ちょっとで大畠に着くのが魅力だという。島に移住して12年になる。旅行が好きな奥さんと、先ほど鳴いていた犬と一緒に島に住んでいる。釣りをして新鮮な魚は自給、僅かばかりの家庭菜園で野菜をつくり、時々、奥さんと犬と車で旅行に出かけるそうで、誠に人生を楽しんでおられる。

時々、島に住みたいといって都会からやってくる人がいるそうだが、八木さんはその人たちに「趣味は何か」と聞くのだそうだ。しかし、特段趣味のない人が多いらしい。島の生活は魚釣りが好きでないと飽きてしまうと強調されていた。





集落上段の2棟続きの別荘(左)、島に実際に生活しているご夫婦の住宅(右)

八幡神社

在来集落の背後にあるこんもりとした高台に八幡神社が置かれている。八幡神社の両側の谷戸地はかつて水田があったと推定される。一部は別荘地や家庭菜園として活用されているが、大部分は荒地になっている。

神社への登り口には古びた石の鳥居が建つ。柱の銘には寛保3年とあることから、1734年、つまり 290年ほど前に建てられたものだ。神社への階段はほとんど手入れがされていないため階段の石がずれ、あるいは崩れているところも多く、さらに手すりも壊れているから、歩くのは危なっかしい。

階段を登ると、平らな境内になる。落ち葉が積もり、周りを囲む樹木でうす暗く、じめ じめしているため蚊が多い。灯篭と狛犬の先に拝殿が置かれている。

境内の一角に「村社八幡宮」と書かれた石碑が建ち、大正9年11月26日に神饌幣帛料供 進神社の指定を受けたことが記されていた。この指定を受けると、例祭にあたり地方公共 団体の神饌幣帛料の供進を受けることや祈年祭・新嘗祭にも神饌幣帛料の供進を受けるこ とが、それぞれ認められた神社であること、つまり神社の格を表している。石碑を建てた ところを見ると、島にとってこの指定は名誉なことだったのだろう。

この石碑の裏に神社の歴史が記されていた。八幡神社の創建は1642(寛永19)年で、その後、1731(享保16)年に修築、1769(明和3)年に改築され、1873(明治6)年に村社となった。笠佐島に人が住み始めたのは幕末のことなので、神社が創建されたころは、上述したように燃料の薪を採取する土地にすぎなかった。

拝殿の外壁は応急的にベニヤ板が張られていたが、長年の風雨で剝がれているところが 目立ち、本殿も相当傷んでいた。すでに神社を管理する在来島民はいなくなっており、八 幡神社は朽ち果てていく運命にあるだろう。

笠佐島には寺はない。そして墓もない。神社から港に行く途中に公民館があり、入口に 鐘が吊るされていた。



八幡神社の鳥居(左)、八幡神社の拝殿(右)

通勤農業

地方港湾・笠佐港は連絡船の発着場を挟んで2つのブロックに分かれる。東側は浚渫によって水深が確保され漁船等を係留するスペース、西側は砂浜で浅いから船は泊められず砂の移動を防止するために沖側に消波ブロックが積まれている。

港には4隻の船が係留されていた。漁船というよりも移動用ないしは遊漁用だろう。10年前は、釣り船が3隻、民宿「かささ」の釣り船1隻、在来島民の船2隻の合計6隻であったから2隻減ったことになるだろう。減った分は、たぶん在来島民の船に違いない。

連絡船を待っていると、朝一便の船で一緒だった男性がサツマイモの苗を持って現れた。 彼は 10 年ほど前から島に通い始め、百姓仕事をしているという。恐らく笠佐島の出身で、 実家の畑があるので、定年後の暇な時間を野菜作りにあてているのだろう。サツマイモの 苗は買うと高いので、知人から譲ってほしいと言われ、島で苗を作っていたようだ。

旧島民の住宅脇には小規模な畑が幾つもあることから、こうした通勤農業を営む旧島民が何人かいるものと思われる。このように笠佐島で農業が可能なのはイノシシが生息していないからだ。

連絡船が到着した。おばあさん1人が船から降りた。上述した梶川さんが車で現れたので奥さんかもしれない。第2便には郵便配達人が乗っていた。船を降りるとすぐに郵便物を配達し、再び船に戻って来た。僅か数分のことである。彼によると、笠佐島で郵便物の配達対象になっているのは6戸ほどらしい。

12 時 10 分発の連絡船で島を後にする。港には朝柳井から乗ったタクシーが迎えに来てくれていた。町役場の大島庁舎によって資料を入手、続いて情島に渡るべく周防大島北端の伊保田に向かう。



笠佐漁港に係留されている船 (左)、住宅脇で作られている西瓜 (右)

【文献】

宮本常一(2008):私の日本地図9、瀬戸内海皿 周防大島、未来社

宮本常一 (1994): 宮本常一著作集、周防大島を中心としたる海の生活誌